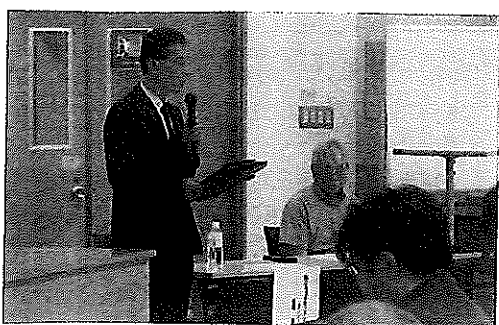


AWBCが道教大旭川校で交流セミナー 4校の教員が「文理融合」の手がかりを探る

旭川市内の4高等教育機関で構成する旭川ウェルビーイングコンソーシアム(AWBC)の第3回交流セミナーが9月9日、北海道教育大学旭川校(旭川市北門町)で開かれ、4校の教員それぞれが自身の取り組んでいる研究テーマについて発表



「文理融合」への手がかりを探究したAWBCの交流セミナー

し、集まった約20人の教員たちは自分の研究分野に引き合わせながら「文理融合」の可能性を考え

た。旭川の「知の拠点」を取りまとめる連携組織「AWBC」として、価値多様化の時代にあつて、理系・文系それぞれの枠内にとどまっていたは、それぞれが取り組んでいる研究が時代を切り開いていくものになっていくのではないのかという課題認識に基づき、昨年9月にスタートし、今回が今年2月に続いて3回目。

前回同様、4校から一人ずつ、4テーマの発表があり、最初の旭川高専電気情報工学科・蛭田雄

也助教の「鏡で3次元を視る」は、反射屈折撮像系(鏡+レンズ)による反射屈折系望遠鏡などにも使用)に基づいて、3次元

シーンを推定する研究。例えば、地表から見えず、また人の立ち入り禁止されている小口径トンネルの推進工法の際に多大な時間と労力を要していることに対応するもので、「トンネル内部に付与したランドマーク(円)からのスケールを推定できた」とした。

次の「疫学研究とは」(西條泰明・旭川医大社会医学講座公共衛生学疫学分野教授)は、「健康問題の頻度や分布の特徴記述する(↓医療・公衆衛生上の対策へ)」「健康問

題や疾患の原因や危険因子を解明する(↓原因や危険因子を除去・減らすことに役立つ)ことを内容とする学術分野。

「一人ひとりの患者の診療の際に現在の最良の証拠を、良心的かつ妥当性のある用い方をすること」(根拠に基づく医療EBM)の発展のため、つねに実験室の基礎医学研究と人に対する研究を行き来し進めているという。

旭川市立大保健福祉学部コミュニティ福祉学科・大野剛志教授のテーマは、「コミュニティの社会学」道内・全国先進地調査を経て『町内会の維持と活性化の秘訣』を探る。

「町内会は本当に必要か?」「持続可能な地域組織とは何か?」の問いを切り口に、「シビルミニマム(市民生活の最小限の保障)」と地域共助の関係性を論じた上で、町内会の未来のための活用可能な概念として、「地域家族」「テーマ型コミュニティ」「連携知」などのキーワードを提示した。

最後の「地域貢献活動『えんぴつとはし』について」(高橋一将・北海道教育大旭川校理科教育准教授)は、同校の強み(教育)を生かし、地域の子どもたちに「えんぴつ」(学び)と「はし」(食)を提供すること、さまざまな状況にある子どもたちに未来への橋をかけたいという活動。

発表ごとに質疑応答の時間が設けられ、参加者からは多くの質問・疑問が飛んでいた。